研究過程

講　師　　神田　浩行　先生
（環境共育事務所Ｋ＆Ｋプランニング代表）

回	期　　日	テーマ及び内容	俯瞰図番号	人数
1	５月20日（水）	環境を構成するものとは	E4 －Ⅰ	54
2	６月17日（水）	自然触れ合いの方法を考える	E4 －Ⅱ	53
3	９月９日（水）	自然に「直接触れる体験」を実施するⅠ	E4 －Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	58
4	10月21日（水）	自然に「直接触れる体験」を実施するⅡ	E4 －Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	47
5	11月18日（水）	生活を通した触れ合い ～食育を題材にして	A2 －Ⅱ	51
6	１月20日（水）	身近な自然をいかす ～園庭マップを題材に	E4 －Ⅰ・Ⅱ	113

●研究参加園（24 園）

川崎ふたば幼稚園　若宮幼稚園　梅園幼稚園　小峰幼稚園
鹿島田幼稚園　サクラノ幼稚園　平間幼稚園　宮内幼稚園
つぼみ幼稚園　諏訪幼稚園　洗足学園大学附属幼稚園　若竹幼稚園
たちばな幼稚園　津田山幼稚園　梶ヶ谷幼稚園　川崎たまがわ幼稚園
宮前幼稚園　丸山幼稚園　菅幼稚園　東菅幼稚園
桐光学園寺尾みどり幼稚園　柿の実幼稚園　川崎青葉幼稚園　こうりんじ幼稚園
ちよがおか幼稚園

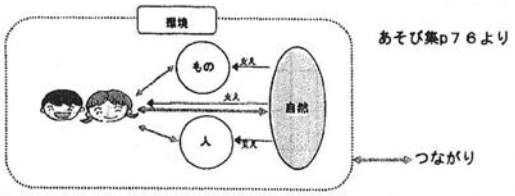
●年間オブザーバー

川崎市環境局環境調整課

第１回　環境教育研修会
月　日　平成 21 年 5 月 20 日（水）
場　所　洗足学園附属幼稚園
講　師　神田　浩行先生
（環境共育事務所Ｋ＆Ｋプランニング代表）
テーマ：「環境を構成するものとは」
俯瞰図番号　E4 － I

１　身近な自然探し
①園庭に出て、３つ、自分の見つけた自然のものを紙に描き出す。（虫、植物、生き物などを絵に描く）
②7､8 人のグループに分かれ､グループごとに、①で描き出したものを用いて、園庭の絵地図を作り、他グループと見せ合う。

《講師より》
環境教育において環境を構成するものは、「自然・もの・人」である。
その基本は「自然」である。



幼稚園教育要領にも、自然との触れ合いについて触れられている。
＜幼稚園教育要領より＞
・幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きな、美しさ、不思議さなどに、直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。
・身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする意欲を育てるとともに、様々な関わり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるようにすること。

２　保育者としての自然の見方
①科学的な見方
・生態系的とらえ方
・限りある存在であること。
（有限　失われたら戻らない存在）
・つながり（捕食､植物連鎖､共生　生態系循環）
・たくさん
（多様性　色、形、香り、感触＝五感）
・存在
（地球の仲間、共生共存、事象への存在）
②自然観（生活・風土）
・感謝（恵みへの感謝など）
・神秘性（自然崇拝）
・文化（うち、文学、芸術など）

３　保育者としての自然との関係
・まず自然を好きになる
・自分の好きな自然の世界を見付ける
・“自分の好き”を子どもたちに伝える
・子どもたちの“好き”を引き出す

４　保育における自然触れ合いの方針
はるか遠くの自然や、将来学ぶであろう自然を「知る」ことより子どもの頃は足もとの自然との関係を築いていくこと､「触れて､感じる」こと、それが遠くの世界、将来の学びを理解する素地となる。
→子どもたちが園庭の自然に気づき、自然との関係を築いていくこと。

◎「身近な自然」を見つけ、子どもが自然と共感する方法を考えることが大切である。

第２回　環境教育研修会
月　日　平成 21 年 6 月 17 日（水）
場　所　総合自治会館　ホール
講　師　神田　浩之先生
（環境共育事務所 K&K プランニング代表）
テーマ：「自然触れ合いの方法を考える」
俯瞰図番号　E4 － II

１　身近な自然に触れる
◎紙に書いてある指令のものを探そう。
①楠の葉が入ったビンの匂いをかいで、同じ匂いのする葉っぱを探す。
②ハート型の葉っぱを探す
　→かつらの葉
③赤くて丸い実を探す。
　→やまももの実
④一定区間の間にある色画用紙が何枚あるか数える。
《講師より》
　はるか遠くの自然や、将来学ぶであろう自然を「知る」ことより子どもの頃は足もとの自然との関係を築いていくこと、「触れて、感じる」こと、それが遠くの世界、将来の学びを理解する素地となる。

２　自然と子どもたちを結ぶ方法
◎宮前幼稚園の自然展示の写真を見る
・気付いた先生が既設のテーブルを作る。
　季節のテーブルをきっかけにして子どもは園の自然を知る。または興味をもち自然をみつけるようになる。
《講師より》
・園にある自然を展示することによって子どもが自然に興味を持つ。
・園に色々なものを取り入れて保育者自身の感性を磨いて欲しい。

３　フォトランゲージ
◎写真を見て、写っている自然が何を考え何をしているかを想像する。
・自然物の「こころ」をつかむナチュラリストになろう。
《講師より》
・自然を見て、どういう生き物か種類を考えるよりもその生き物が何をして何を感じているのだろうかと考えることが大切である。
・自然に対して、何でここにいるのか？何をしているの？何でこんな形をしているのか？楽しそうだな、幸せそうだな、などまるで人間を相手にするように感じる見方が幼稚園の先生には必要といえる。

４　３つの自然の紹介
その１　「遠くの自然」
→遠くにある豊かな自然に触れることは保育者の感性を育み、自然観を豊かにする。ただ訪れるだけでは効果は薄い。自然案内人に案内されるのがベスト。
その２　「日頃の自然」
→日帰り距離にある豊かな自然に触れることで、自然へのアンテナを保つ。
その３　「園の自然」
→いつも接している園の自然に目を向けることは、保育者の自然観の基礎となる。
《講師より》
・自然への感性を高めるには、都会は難しいので夏休みを有意義に使って、良質な自然を体験するのがよい。
・近所で自然と触れあう機会もあるので、ぜひそうした機会を生かして感性を磨いて欲しい。

第３回　環境教育研修会
月　日　平成 21 年９月９日（水）
場　所　梅園幼稚園（南河原公園）
講　師　神田　浩之先生
（環境共育事務所 K&K プランニング代表）
テーマ：「自然に『直接触れる体験』を実施する 1」
俯瞰図番号　E4 － Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

１　公園内で自然の YES・NO ゲーム
①南河原公園にはドングリがたくさんあるが「ドングリ」という種類の木は存在するのか。
→ NO
②神奈川県のシンボルの木は「イチョウ」である。
→ YES
③川崎市の花は「ツツジ」である。
→ YES
④トトロが住んでいる木には「ドングリ」は実る。
→ NO

２　たからものさがし（あそび集）
①好きな樹木を選び、樹木の特徴を書く。
（手ざわり、におい、模様、高さ、太さ、その他）
②別紙に葉っぱの絵をかいたりクレヨンで樹皮のこすりだしをする。
③自然のカルテを他の人に渡し、どの木か探す。

３　私は誰でしょう（あそび集）
①たからもの（葉っぱ）を 20 秒間見る。
②その葉っぱの木を探す。

→ 2、3 をすることによって自然に触れたり見たり五感を使うことになる。

４　自然の気持ち（あそび集）
①好きな葉を見つけ、幼稚園に持ち帰る。
②その葉っぱの気持ちになって１フレーズ言葉をつける。
③周りの人と見せ合う。

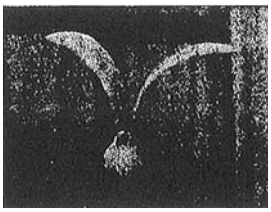
５　まとめ
〇自然の遊びのヒント４プラス４
ヒント１　色・形から入る。
自然物（葉っぱ、枝、石、土）の色や形を使って遊びを考える。
ヒント２　自然は何でも遊びの素材になる。
草花や虫だけでなく空も風も大事な素材。
ヒント３　あつめる・くらべる・競う
自然物を集めたり、比較したり、時には競わせたりして、子どもたちの「注意力」や「？？」「！！」を引き出す。
ヒント４　イメージする
さがす、だけでなく考え、イメージする。そこから演じる遊びもあり。
プラス１　答えを与えるより発見を大切に
名前は何？よりも興味やおもしろい！と思わせる「！」という発見を導く誘導を。
プラス２　全員よりまず自分で
学年の全体で、クラス全員で、とハードルを上げずに、まず 2、3 人から。
プラス３　続けてこそ意味がある
１度でなく２度、３度と続けると子どもの注意力、興味、好奇心がアップする。
プラス４　体験（五感）を基礎とすること
「体験（五感の触れ合い）→表現」のくり返しで感性を広げ、深める。

《講師より》
幼児環境教育とは、「自然が大切、自然とつながっている」と子どもたち１人１人が感じられるようにすることである。そのためには遊びを通して自然の大切さを感じさせることが重要である。
本当に自然は大切であるということを思いながら保育してほしい。自然に触れ合うことを１回で止めないで何度も繰り返し行ってほしい。

第４回　環境教育研修会
月　日　平成 21 年 10 月 21 日（水）
場　所　梅園幼稚園（南河原公園）
講　師　神田　浩之先生
（環境共育事務所 K&K プランニング代表）
テーマ：「自然に『直接触れる体験』を実施する 2」
俯瞰図番号　E4 － Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

１　公園にて
①目をつぶり、何の音が聞こえるか、耳を澄ませる。
②ザラザラしたもの、フラフラしたものを探し、見せ合う。
③秋の自然物、目に留まった景色、聞こえてくる音、秋だと感じる色、の４つの項目に当てはまるものを、それぞれ見つけ、書き出す。また、持ち帰ることができるものは幼稚園に持ち帰り、その後、グループごとに分かれ、お互いにどんなものを見つけたのかを見せ合う。

２　幼稚園にて
①ラワン、カエデの種の模型作りをする。


ラワン

カエデ

②実際に、飛ばしてみる。
→クルクルと周りながら落ちる。

３　種について
植物は、種をばらまいて子孫を増やしている。よって、種が立派に育ったら、なるべく遠くに運ばれて、しっかり芽生えてほしい為あの手この手と工夫を凝らす。
①美しく色づき、おいしそうに熟れ、鳥や動物に食べてもらい、その食べ残しや食べ忘れから芽を出す。
→モチノキ・タブノキ・ドングリ・クルミ
②木の実や種に、薄い翼や毛をつけて、風で運ばれやすくする。
→カエデ・アキニレ・マツ・ヤナギ
③水に浮くような形にする。
→クルミ・ココヤシ
④自分の重さで落ちて転がる。
→ツバキ・ムクロジ
⑤ばねの仕組みで、種をはじき飛ばす。
→フジ・コクサギ
⑥動物の体にくっついて遠くに運ばれ、長い年月、芽を出すチャンスを待つ。

《講師より》
幼児環境教育とは、「自然が大切」「自然とつながっている」ということを理解し、行動できる大人になるための教育であり、また自然の性質やつながりを自然体験（遊び）・生活体験を通して体感する教育である。

科学性の芽生えや感受性、季節感のほかにまず多様な自然の存在を感じ、触れ合いを重ねて、自然とのつながりを感じることが大切である。
→人は自然の一部であることを理解してほしい。

第５回　環境教育研修会
月　日　平成 21 年 11 月 18 日（水）
場　所　国際交流センター
講　師　神田　浩之先生
（環境共育事務所 K&K プランニング代表）
テーマ：「生活を通した触れ合い」
～食育を題材にして
俯瞰図番号　A2 － II

１　園庭マップの発表
①各園の園庭マップを会場の机の上に並べ、見学をする。
②ポストイットにコメントを記入する。（自然・生き物情報としてのわかりやすさ、保育での使いやすさ、よかったところ、アイデアなど）

《講師より》
環境教育の目的は「人間は自然の一部」ということをわかり生活していくことである。幼児環境教育では遠くの自然より前に「足元の自然」を大切にしようということで園庭マップを作成し、これを保育に取り入れて園庭の自然（生き物、土、風、雨）を子どもたちに伝えてほしい。

２　食育
①「ごちそうまと」は誰に言うのか考え用紙に記入する。
②グループで①について話し合う。

《講師より》
感謝の意味で「御（ご）」と「様（さま）」が付いた「御馳走様（ごちそうさま）」は江戸時代後半から、食後の挨拶語として使われるようになった。
普段食べている物をつくるにあたってたくさんの人々が関わっている。
幼稚園での栽培には、見えにくくなった食、素材を伝えるという大切な意味がある。

［お弁当の道のり］
①グループで、おにぎり弁当が作られるまでの過程を模造紙に記入する。
②１グループが作った過程を発表する。

［フードマイレージ］
・食べ物の輸送距離のことで、重さ×距離（t・km）で表す。1994 年に英国の消費者運動かティム・ラング氏が提唱したといわれる考え方。
食料の生産地から食卓までの距離が長いほど、輸送にかかる燃料や二酸化炭素の排出量が多くなるため、フードマイレージの高い国ほど、食料の消費が環境に対して大きな負担を与えている。

＜まとめ＞
・共食：分配
→無防備な人類が生き延びたのは、食料分配したからである。分けあって食べることにより、相互依存、分担、言語などが発達し、個から社会性が生まれた。
分ける人が、相手を思いやり心が伝わる。「人間は共食する動物である。食事を分かち合うことは、心を分かち合うことである。」（文化人類学者　石毛直道）
みんなで準備をして食べることも通じるものがある。お弁当のクラスのお友だちを思いやり準備をする。
・身土不二
→「身体（身）と環境（土）とは不可分（不二）である」ということ。
「身体と大地は一元一体であり、人間も環境の産物で、暑い地域や季節には陰性の作物がとれ、逆に寒い地域や季節には陽性の作物がとれる。クラス土地において季節の物（旬の物）を常食することで身体は環境に調和する」というもの。

《講師より》

　人も自然も同じ命。命は地球がつくりだしたもので、我々はみな「地球の子ども」である。そのような意識を持つことによって、自然を大切にしたり、地球のなかに生かされていることを知る。